

分布：沖縄を除く全国

コウホネ (スイレン科)

学名: *Nuphar japonicum*
ヌファル ジャポニクム

河骨

別名：川骨(せんこつ)、カワホネ、カワト、カワバス、たいこのぶち

主な生育場所

浅い池や沼、流れの穏やかな用水路に生育する水生植物。明るい水辺に多く、底質が泥深い環境を好む。水質に関しては、比較的幅広い環境で生育可能だが、汚濁が進むと減退してしまう。

特徴

種子または根茎で繁殖する多年生。海草のアオサに似た水中葉と肉厚でつやがあり水面上に立ち上がる抽水葉をつけるが、やや円心状の浮葉が混じることもある。6月頃から秋にかけて、花茎を水面上に伸ばし、その先に直径4~6cmほどの濃黄色の花を咲かす。地中には太く長い地下茎を発達させ、節からひげ根を出す。



名前の由来： 泥中に長く縦横に這う根茎は、肥大して全体に白味を帯び、葉の跡が目立つため、ごつごつとした背骨を連想させ、「かわほね(河骨)」と呼ばれたことによる。

<農業との関係>

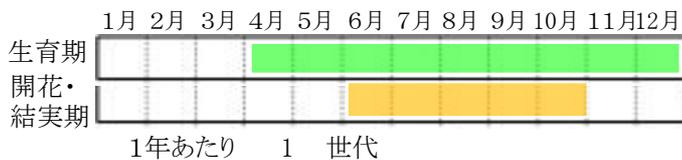
ため池や土水路などで、ときに大きな群落となり、取水や通水を阻害することがあり、また地下茎もよく発達し、その除去も困難なことから、害草として扱われる。しかし、光沢の強い葉や可憐な花は、観賞用としてもはやされ、庭先の池などで栽培されることも多い。コウホネやその近縁種は、水辺の改変や水質汚濁によって、全国的に少なくなっており、共存する知恵が必要である。



落水後のため池で露出した地下茎

<生活史>

関東 地方の例(目安)



<類似種>

全体に小型で浮葉と沈水葉のみで抽水葉をつけないヒメコウホネ、葉柄が中空で西日本に分布するオグラコウホネなどがある。

<一言うちく>

世界に20種ほど知られているコウホネの仲間ですが、抽水葉や浮葉をつけずに水中葉だけのコウホネが2006年に栃木県の用水路から発見され、新種シモツケコウホネ(下野河骨)として登録されました。この貴重なコウホネは、地域の財産として地元の方々に大事に守られ管理されています。



水路を埋め尽くして繁茂するコウホネ群落

<人との関わり合い>

観賞用として栽培されるほか、食用・薬用としても利用されている。レンコンを利用するハスに対し、「ヤマバス」とも呼ばれ、掘り上げた根茎をよく洗い、薄く切って熱湯でよく茹で、その後一晩流水中に晒すと、土の香りがほどよくなかなかの珍味となる。天ぷらや煮物、油炒めなどにする。沈水葉も同様にして食べることができる。

また、根茎は川骨(センコツ)と呼ばれる生薬であり、利尿や強壯、腫れ物などに効くとされる。

<俳句や短歌への登場>

【季語・夏】

小鮒取る童べ去りて門川の河骨の花に目高群れつつ(正岡子規)

河骨の花に添ひ浮くいもりかな(高浜虚子)